

京鹿子

京都府立総合資料館蔵書

8月号

— 近詠 —

鈴鹿呂仁

拾掬集 その三十五



湖族守る堅田の浮巢見え隠れ
調略の鳩の浮巢のままならず
明易し夢の廊下に羊立つ
栗の花蘭けて乱世の雨催ひ
梯梧散る利休の翳に血の匂ひ
夏萩の雨はこぼさじ朱は弥陀へ



鯉 睨む 錦 市場を 三 往復
短 夜 の 堂 々 々 め ぐ り 性 善 説
こ れ や あ れ あ れ や こ れ や で 明 易 し
鰻 食 ふ う り ざ ね が ほ の 首 伸 ば し
船 宿 の 軒 行 灯 の 梅 雨 あ か り
陋 屋 の 老 鶯 の こ 糸 臈 長 け て
い ざ 鳥 羽 へ 搦 め 手 よ り は 黒 揚 羽
城 跡 の 石 の 高 積 み 木 下 闇



— 近 詠 —

文月星

鈴鹿 仁



天窓や夢のふくらむ文月星
水打てば小石つぶやく風の中
文月や奥眼の甲冑星を恋ふ

— 追懷 —

桐の花敗者たたへて村豊か
〔平成十二年作〕

古戦場ぬけ出て蟻の私語殖す
— 〃 —

—
近 詠
—

和田 照海

夕 蛩

一 の 瀬 に 応 へ 二 淵 の 夕 蛩

海 峡 の 風 を つ ま ん で 袋 掛

山 雨 来 て 誘 ひ 出 さ れ し 墓

毛 虫 焼 く 炎 の 垂 る る 誕 生 日

羽 衣 の 松 に 卯 月 の 靄 が か り



松本 鷹根

苔の花

蹲踞に跳ねる木洩れ日苔の花

田水張り里の秘めごと雲に浮く

夏薊雲は愛宕に執着す

姫女苑土手の傾斜に風馴らす

涼風に刻解く御影浮御堂



近 詠

塩貝 朱千

夜明けのハーブティ

フルートより魔笛の調べ梅雨に入る

走り梅雨青き夜明けのハーブティ

観音堂開き睡蓮目覚めよき

半夏生観音さまの紅濃ゆし

明滅の闇に余情や螢の夜

英華採集

沈丁花いつも苦手なくれんぼ

高 槻 杉 井 真由美

幼い時の遊びには色々あるが「かくれんぼ」は、誰もが体験する遊びに違いない。その遊びが苦手と言う作者。必ず一番先に見つけられてしまうのであろう。それは、隠れる場所にあることが季語の置き方で分かる。沈丁花の芳香について誘われるままに選んだものと思われる。この場所は、選んだ作者が女性であることと安心出来る和ませてくれるであろう居心地の良いところなのである。「かくれんぼ」という遊びが、作者の内面を掘り起こし思いを具象化させた一句となっている。

七色の大阪メトロ図子供の日

京 都 増 谷 とし子

大阪メトロ図は、大阪府内を東西南北に走る大阪の地下鉄の路線図である。東京のそれは、大都会さながらの入り組んだものであるが大阪も負けじと縦横無尽に蜘蛛の巣を張り巡らしたような感がある。通常は八色により色分けされているのであるが、七色としたことにより夢が広がり季語の子供の日と響き合う。両親が子供のために企画した子供の日の計画に子供の瞳は大いに輝き充実した一日を過ごしたことであろう。

蝌蚪に足われに納税通知状

船 橋 金子 正道

「やがて手が出る足が出る」と唱歌に親しまれている「おたまじゃくし」は、変わり果てる自分の姿に鏡を覗くことがあるとすれば、さぞかしビックリ仰天するに違いない。片や納税通知は、作者もある程度予測出来ることとは言いながら、初めて納税するものであれば納税額を見て驚いているのではないか? 「蝌蚪」の季語を置き俳味豊かに詠まれた一句は十分に読み手を引き付けるものである。

神麓集

梅は実に 藤岡紫水

己が緋に耐へかね散れり富貴草
灯しつつ生命継ぎ合ふ恋螢
十葉や老いて用なきくすり指
こだはりの残る一と言梅は実に
逢ふための別れもありぬ青葉冷

蝸 沼田巴字

厚雲のゆるむことなし広島忌
主婦の暮しの一入重し稲の花
法師蟬よき一本に恵まれて
蝸や師弟まみえし夕まぐれ
三秋や気管支弱きわが生れ

梅 雨 丸井巴水

藤棚のくらきへ誘ふ魔女の聲
伸びしろを少し残せる梅雨籠り
蟻穴をふさぐ二日の雨の昏
耳元に初蚊が迷ふ広辞苑
嫌はれてゐるも生甲斐梅雨茸

花は葉に 植村蘇星

惜しまれてこそその人生花は葉に
花は葉にさてとお返し何とせむ
打つ走る追ひし打球や風光る
柿の花母の妙薬傷舐める
九合目目指す鼓動や夏近し

神麓集

打水 北川孝子

遠き世へ追伸のごと水を打つ
哲学の片鱗もなく水を打つ
青林檎はじめての恋遠きまま
省略の過ぎたる暮し水を打つ
水を打つ一心不乱という一語

去り際 直江裕子

ひんやりした未来さくら蕊真っ赤
去り際にふり返る癖さくら蕊
わたくしに昔くちびる鳥の恋
海市から戻らぬひとの靴が着く
八十の恋の終はりは露を煮て

心太 高木晶子

湧水に生き残りたる水饅頭
線引きのまだこちら側蓬餅
約束の角の明るさ花水木
返信を終へて早めの心太
訪れし人みな帰る青葉の樹

天女の息 伊藤希眸

てんりゅう 龍川の流れ巖か鶴一羽
神の道松の花より天女の息
東照宮荒梅雨にしてみくじ引く
三光鳥聴けず夜明けの沖をみる
睡蓮の花打つ尾鱗龍潭寺

神麓集

ハンカチの木

奥田筆子

キウイ内蔵青い太陽反発心
淡海いま鎖骨の白き夏来る
ひかりとは水溶性の青楓
ごり飴煮歯ぎしりする程青い空
ぐしよぐしよのハンカチの木に距離置きて

さくらの夜

井上菜摘子

もう弾かぬピアノ菜の花が眩しい
鳥の恋木立をぬけて私の恋
ヒヤシンスあたりで話すれちがふ
指に湿りつばき見すぎたかもしれぬ
組みしかひな解けば別れさくらの夜

夕焼小焼

村田あを衣

夕焼小焼砂場あそびの子のひとり
麦秋の村遠くなる無縁墓
小満や未完の円の近づけり
新緑へのみ込まれたる瓢鮎図
蟻一匹仏足石をくすぐりぬ





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

ひらがなを解せば蝶の吐息とも

京田辺 山中志津子

沈丁花昨日を白紙にしてしまふ

水音の中まで真昼若葉光
透きとほるまで新緑のまんなかに

城陽 鷺山 珀眉

初燕手の切れさうな言葉欲る

万緑とつりあふ鍾なかりけり

廃校の深きねむりや桐の花

反復のあとの逡巡蜷のみち

口笛はピーターパンかも夜の新樹

感嘆符打つひと処薔薇の雨

むらさきに重ねる師恩桐の花

京 都 井尻 妙子

機嫌よく散つて御室の春をはる

風蘭や庭のしづけさ余すなく

京 都 片山 熙子

惜春や右耳に聞く踏切音

山吹の黄で塗りつぶす裏通り

まつ直ぐに来て晩春の物おもひ

思ひ出のことばあつまり藤の花

新緑を袋詰めして道の駅

杉山は風棲むところ四月逝く
軽鼻の子に日のゆりかごや寺の池

囃りや万骨ねむる激戦地

福 山 亀井 福恵

スクランブル交差点発聖五月

さくらさくら千本口へ七曲り

峡深く花散る吉野行在所

行宮の風立ちやすし鼓草

桐の花女は強し母強し

きらきらと世継たなびく鯉幟

新緑や天空の城野面積

風走る八十八夜の山の騷

二重とび本気出しある五月晴

福 知 山 西村 滋子

一片の虫食ひもなし柿若葉

万緑やハットトリック決めし孫

蝌蚪に足われに納税通知状

息吸つて止めて撮らるる春愁

行く春や巫女ジーンパンで絵馬洗ふ

亀なんて字は知らぬぞと龜鳴けり

壇上で未来語る子新樹光

吾子四人レンズのやさし花だより

イースター一服の茶とマラーと

葉桜や人のまばらな石畳

雪はとけみどりの眺め芝みどり

麗かや空はきれいな顔を出し

さあ春のお出かけ楽しうれしかり

春の部屋きれいに掃除さあ外へ

散る桜老人座するベンチ染め

花吹雪自然劇場豪華版

虎杖や昭和の味を確かめり

春霞山里すべて夢の中

宿の下駄我が影映す春の池

孫来てはせがむ将棋や春一番

旅終へて朝の散歩や花は葉に
ランドセル背中はみ出す入学児

船 橋 金子 正道

アリソナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子

酒 田 藤波 松山

さいたま 神田 惣介

沈丁花いつも苦手なかくれんぼ

亀鳴くや遅き歩みを見咎めず

距離感の詰め方惑ふ沈丁花

惜春や心の扉閉めしまま

七色の大阪メトロ図子供の日

惜春や日に三回のスクワット

京 都 増谷とし子

高 槻 杉井真由美

